

NEWSLETTER No.108
ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music
January 15, 2020

一般社団法人
東洋音楽学会

会報 第108号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
E-mail: LEN03210@nifty.com ホームページ: <http://tog.a.la9.jp>

目次

第70回大会レポート……………1	沖縄支部からのお知らせ……………12
通常理事会・総会議決事項のお知らせ……………10	ICTM(国際伝統音楽学会)に関するお知らせ……………12
前会長・塚田健一氏を悼む……………10	会員異動……………12
会報・支部だより等の送付方法に関する アンケートにご協力ください……………10	図書・資料等の受贈……………14
第36回田邊尚雄賞アンケートのお願い……………11	新刊書籍……………14
会費納入のお願いと大学院生会費割引制度の お知らせなど……………11	新発売視聴覚資料……………15
東日本支部からのお知らせ……………11	編集後記……………15
	第8回定時社員総会議事録(抄)・添付書類……………16

第70回大会レポート

(2019年11月16日～17日 京都市立芸術大学)

第1日(11月16日)

◇公開講演会「語りの立体化そして復曲—狂言、能、題目立」

狂言《文蔵》(大蔵流)

シテ 茂山千三郎

アド 松本薫

解説 長田あかね(神戸女子大学古典芸能研究センター)

復曲能《真田》(観世流)

シテ 加藤眞悟

ワキ 安田登(下掛宝生流)

ツレ 河村晴久・河村和貴

地謡 河村和晃

解説 丹羽幸江(日本伝統音楽研究センター)

題目立《石橋山》

出演 題目立保存会(奈良県奈良市上深川町)

解説 沖本幸子(青山学院大学総合文化政策学部)

司会・企画 藤田隆則(日本伝統音楽研究センター)

日本伝統音楽研究センター公開講座を兼ねた公開講演会は、「源平盛衰記」の「石橋山の合戦」を共通の題材とする現行の狂言、復曲された能、復活された題目立という状況が異なる三種の演出様式を比較、鑑賞することが目的とされ、それぞれの解説、そして藤田氏の本企画の説明を加え、見応え聴き応えのある講演会であった。

第一の現行の狂言《文蔵》は、石橋山の合戦の様子を、主人が愛読書の草紙を暗唱する形で長々と語り、終盤で文蔵ならぬ温糠(うんぞう)を太郎冠者が思い出す、という内容で、主人の手振り身振りを交えた語りが際立った。狂言上演の後、長田氏より、能《真田》との共通点や、石橋山の合戦の筋書きに狂言独自の改編があることなどが丁寧に説明なされた。次いで、藤田氏より本講演会の意図について、現行の題目立のうち長期にわたり上演が途絶えている《石橋山》を本講演会で復活上演すること、この復活は題材を同じくし、能楽師により復曲された《真田》を先行例とすることなどが説明された。テーマの「語りの立体化」とは時空間に文字テキストが音として響くといった意味が込められ、「復曲」とは能の慣例に準じたものという。

第二の能に先立ち、復曲にもかかわった丹羽氏より、もともと素謡用に作られたと推測される《真田》だが、上演可能な形にするため貞享期の謡本などをもとに、小段構成を変更



し、加藤眞悟氏が実際に謡い取捨選択しつつ、吟、拍子、旋律を確定したといった復曲の現場が具体的に語られた。今回の上演では囃子はなく、いわば「素能」とのことで、地謡が張扇と張盤でアシライを付けるという学会ならではの「稽古場や舞台裏の作業を見せるような」実験的な方法が採られたが、それが新たな表現として十分堪能できた。

第三の題目立では、冒頭に沖本氏より、題目立が本来成人儀礼であり奉納芸であるため、石橋山の合戦を源氏の敗北で終えるのではなく、その後の源氏一統の代へと繋げていくところが特徴であること、その詳細さゆえ、享保年間の書写本によれば上演に4〜5時間も要するところを、今日上演可能な40〜50分に圧縮したこと、そして本来の演じ手たる青年(17才)の激減のため、青年ではなく成人で演じる芸能として復活させたことなどが説明された。復活上演では長老の先唱による「みちびき」で登場人物が定座に立ち、次いで番帳指しによる「一番 頼朝」等の詞に導かれて各登場人物が特有の旋律を付したセリフを語る(題目立ては「言う」)。終結部分の「フシヨ舞」は囃子詞にのって足を踏みならして舞うもので、平安末期以降の乱拍子舞に遡るといふ。

講演会では三者が意見交流をする場はなかったが、最後に藤田氏は「それぞれが復曲とは何かを考えていただければと思う」と述べ、結論は参加者に委ねられた。今日における伝統の継承の有りようについて、各自が改めて問いただす機会ともなった。

澤田篤子

◇第36回田邊尚雄賞授賞式並びに田邊尚雄賞記念祝賀会

第36回田邊尚雄賞授賞式は、大会初日の公開講演会に引き続き、京都市立大学講堂で行われた。今年度は田中有紀氏の『中国の音楽思想—朱載堉と十二平均律』(東京大学出版会刊行)に授与された。選考委員会の寺田吉孝委員長欠席のため、近藤静乃委員が贈賞理由の説明を代読した(贈賞理由の詳細は会報106号p.3に掲載)。植村幸生会長から賞状と賞金が手渡され、田中有紀氏から受賞の挨拶があった。

田中氏は、大学の時の指導教官に田邊尚雄の著書を読むように勧められ、『音響学』を最初に読んだとのこと。その後、中国の音楽の研究のためには、音律のことを理解しなければならないと思ひ、長らく遠ざかっていた数学と向き合うことになったが、田邊の音楽理論を理解するだけでも大変だったと振り返る場面もあった。また、田邊の研究から出発した研究が、田邊尚雄賞を受賞することになり、とても縁を感じているとも述べられた。田邊尚雄(1883-1984)が亡くなってから今年で35年、20世紀前半に書かれた著書も多く、田邊尚雄賞の持つ意義を田中氏は再び思い起させたともいえる。

祝賀会は大学会館に移動、参加者は約50名。田中多佳子大会実行副委員長から開会の挨拶があり、当学会の長老、徳丸吉彦先生が乾杯の音頭を取られた。その後、梶丸岳選考委員が受賞者の田中氏の著書について、漢代から清代に及ぶ中国の音楽思想の歴史を儒学者朱載堉の音楽理論をもとに論述したものがこれまでにはないものであり、それが受賞へ至ったと称えた。田中氏からは自分の本を読んだという人から直接感想を聞いたのは初めてでとてもうれしいとのことばが聞けた。祝賀会にはこの日の公開講演会の出演者も参加、途中で実行委員の嬉しい余興もあり、大いに盛り上がった。最後に藤田隆則大会実行委員長から田中氏への祝辞、公開講演会の出演者へのお礼、そして翌日の発表者へのエールが送られ、閉会となった。もうひとつ、今回印象に残ったのは、無農薬野菜を使った“森林食堂”の料理で、見た目も美しく、実際に美味だった。

加納マリ

第2日(11月17日)

◇研究発表1-A(司会:今田健太郎)

日本における音楽批評の出版メディアでの位置づけ
—明治時代の新聞雑誌における音楽批評の展開から—

発表者:西澤忠志

つい最近、当学会に入会したばかりの西澤氏による発表は、A3で6面のレジュメ(参考文献表を含む)とA3で3面にわたるエクセルの表(明治20~40年代の音楽批評記事一覧)が資料として配布され、それらをざっと一見するだけで、その構想の大きさをうかがうことができ、新聞雑誌に掲載された音楽批評を出版メディアのなかで位置づけるという試みも抜群に評価できるだろう。しかしながら(発表者自身も自覚していたようだ)20分という制限された時間に情報を盛り込もうとしすぎた感があり、残念である。つまり、六つの雑誌新聞について音楽批評の展開を詳細に追っていることは配布資料を見れば判るのだが、詳細は「時間の関係上、省略」され(6回ほど)、結果として表層的な部分しか伝わらないのは、発表者にとっても不本意であろうかと思う。「省略」するのではなく、最初から20分で伝えることができることだけに限定すべきであろう。 奥中康人

第五回国内国楽博覧会における「新曲浪花踊」の公演について
—明治中後期における大阪社会と花街との関係—

発表者:笠井津加佐・笠井純一

笠井津加佐・純一両氏による発表は、各種資料を駆使し、(なんとなく知っているけれど実態はよくわからない)第五回国内国楽博覧会の「新曲浪花踊」についての実態、そして、その実態を手掛かりとしてその背景にある大阪四花街、および東京・名古屋との関係をも巡る生々しい状況に迫った点で、大変興味ぶかい発表であった。ただ惜まれるのは、口頭発表に関わる技術的なことである。レジュメには、全体のアウトラインが記されているが(他に7頁にわたって「史料」「表」「図」も掲載)、これがあまりにもシンプルすぎるため、例えば耳から聞こえてくる年代や固有名詞などを視覚的に把握することができず、頭の中で理解しようと努めている間に、発表者の話題はすでに次のトピックに移っている、という具合である。花街研究者には周知のことであったとしても、理解を助ける年表やキーワード等は必要であろう。パワーポイントの文字の大きさに配慮があると、より分かりやすいだろう。 奥中康人

昭和初期の長崎のラジオ放送番組に見る芸妓の音楽活動

—凸助と愛八を中心に—

発表者:安原道子

花街に関する発表が連続し、こちらは長崎の花街についてである。対象とする時代が近代・昭和初期であるとはいえ、文字資料として残りにくい分野であり、しかも—東京・大阪・京都のような大都会ではなく—長崎という場所であることから、調査研究は大変困難ではなかったかと推察される。しかしながら、長崎における先行研究を広く効果的に用い、さらに長崎ローカルの新聞の記事(おそらく、まだデジタル化されていないと思われ、目的の記事をマイクロフィルムで見つける作業は、たいへんな重労働ではなかっただろうか)から判明する芸妓の活動や花街の状況は、たいへん貴重な情報であった。また、フロアからの質問にもあったように、長崎放送局[JOAG、1933~]以外の(とりわけ長崎放送局以前に開局していた熊本放送局[JOGK、1928~]のような)ラジオ放送についても視野を広げ、放送内容の異同を調査することで、さらに精緻な研究となることが期待できるだろう。 奥中康人

◇研究発表1-B(司会:高橋葉子)

梅若六郎家における「甲グリ」の技巧—現行観世流の用法を通して—

発表者:坂東愛子

甲グリは能の謡の音階の最高音であり、シテ方の観世流と宝生流だけにある。観世流ではほとんどツヨ吟に出現し、一曲の中で1箇所、まれに2箇所にものみ配置される。それだけに印象の強い音である。

坂東氏は観世流諸家の甲グリについて、その表記の歴史と技巧の実相を述べた。また、甲グリはクセに配置されることが多く、各家によって出現箇所小異があることを明らかにし、梅若家における真・草2種の類型を説明し、梅若家が現行の梅若謡本を通して近代の技法を伝承・体現していると説いた。さらに、梅若本、矢来本、大成版の表記の違いを譜例にして示した。氏は会場からの質問に答えて、甲グリは、現代の演者がツヨ吟の中で彩りを持ちたいときの工夫にかかわることを述べた。

このような発表によって、私は現行の甲グリを概観することができ、謡のフシの伝承が同一流儀の中でも多様であることが、よく理解できた。 奥山けい子

明治期の能楽囃子太鼓方観世流—14世宗家観世元規と弟子の活動をめぐって—

発表者:三浦裕子

三浦氏は太鼓方観世家の『元規遺事』『入門者摘録』によって、明治期の能楽の伝承の実態を明らかにした。幕末~明治期の太鼓観世流の役者のうち明治期以降の活躍が認められるのは約三分の一であり明治維新の打撃が大きかったこと、幕府の抱え役者は、宗家以外みな芸を離れたこと、残ったのは藩の抱え役者、とりわけ国住が多く、中には上京した者もい

たことを述べた。

宗家・観世元規は維新後に官吏となって舞台出勤が減ったが、実は松代藩抱えであった江戸住役者・松村言吉に大曲を相伝していて、元規と言吉が2人で明治10年代の能楽界を支えたことを三浦氏は明らかにし、元規は家芸から離れていたのではなく、弟子の育成と相伝を通じて芸事の管理を行っていたと述べた。

発表は、史料に載る役者たちの経歴を丹念に調査し、わかりやすい資料を配布して行われ、今後の研究の進展をうかがわせるものであった。 奥山けい子

明治期末の観世流謡曲界における直シ入り謡本の席捲について―丸岡桂の仕事を中心に―

発表者：上野正章

上野氏は、明治後期に謡が大流行した要因を探って、直シ入り謡本の浸透に注目し、これを近代謡曲史の転換点と見て、様々な力関係を視野に入れた研究を行った。直シ入り謡本は江戸中期以来刊行され、明治期にも数々出版されたが、上野氏がそれらの中から『観世流改訂謡本』を取り上げたのは、短時日のうちに多くの部数が発行されたことによる。

発表は出版者・丸岡桂の企画の動機に始まり、新聞報道による出版広報と新聞広告による販売促進を示し、檜書店が著作権侵害で訴訟を起こしたが丸岡が勝訴するまでの過程を順次述べた。

『観世流改訂謡本』が他の謡本の変化を促し、メディアにも影響を与えたことが、豊富な記事引用によってよく理解できた。とくに新聞広告の図版は興味深く、出版者が幅広い層に購入を呼び掛けたことが実感された。 奥山けい子

◇研究発表1-C

[パネルディスカッション]

民博所蔵東洋音楽学会調査記録の意義と今後の活用

発表者代表：福岡正太

発表者：藪田郁 植村幸生

東洋音楽学会は、1960年代から70年代、日本各地の民俗音楽調査を目的に、調査団を組織した。それらの調査データ(録音テープ、ビデオテープ、写真、調査記録など)は、学会事務局に保管されてきたが、事務局が東京藝大から移転の際、これらのデータをいかに保存するかという問題が生じ、1994年、当時の学会役員協議により、国立民族学博物館へ調査データを寄贈することとした。寄贈を受け入れた民博は、データ整理とともに、保存・活用の可能な状態にデータを整え、すでに活用に応じる体制を整えてきている。

収録の調査データは、収録・調査時点から半世紀を経過し、民俗音楽をめぐる環境も大きく変化し、調査を行った藝能自

体も伝承形態を時代の波の中で変容してきた。このような状況のなかで、これらの調査データは、民俗音楽研究において、時代を切り取った基準となる貴重な音楽遺産と位置付けられる。

本学会の行った調査は、今日は解散したが、文系学会の連合組織であった九学会連合が科研費を申請し地域をさだめ、総合的に行ったフィールドワークと学会が日本コロンビアと共同しレコードを作成する目的で行った調査と収録が主である。九学会連合のフィールドワークは、北下半島(1963-65)、利根川流域(1966-69)、沖縄(1971-73)、奄美(1975-77)であり、成果は、報告書として刊行するとともに、機関誌「人類科学」に毎年成果報告がされた。日本コロンビアとの共同調査は、1966年の渡島半島から奥能登、薩摩半島、土佐、飛騨と続き、渡島半島は、LPレコードが作成された。他に、1964年実施の五島列島調査データも民博に収められた。

本パネルディスカッションは、はじめにデータを受け入れ、公開にまで努力された民博の福岡正太氏が、前述のような受け入れ経過、録音テープ、写真、メモなどの概要、テープ本数などを具体的に紹介され、問題点を含めて、活用方法(具体的には、民博のホームページ参照)を説明された。

後半は、データを実際に活用された藪田郁氏が土佐調査のデータから西畑人形を取り上げ、活用事例を報告。続く植村幸生氏は、大学における研究の一環として、利根川流域調査データから、この地域に広く分布する三匹獅子舞のデータを取り上げ、再度伝承地でのフィールドワークを学生と共に実施、時間差による両者間の差異等にも言及し、今後、伝承者との共存をいかにすべきかという提言も行っている。

本学会が行った過去のデータは、このように新たな活力を提供し始めた。多くの研究者などに広く活用されることを期待するとともに、日本コロンビアが収録した音源も眠ったままである。学会との共同作業によりCDなどで再び音に生命をよみがえらせる手段もあってほしい。 樋口昭

◇研究発表2-A

江戸期吉原遊郭における音楽とその機能―洒落本の記述をめぐって―

発表者：青木慧

江戸期吉原遊郭の遊女による音楽の実態について、発表者は卒論時の対象範囲をさらに広げ、今回宝暦期から慶応期までの100余年間に刊行された洒落本193冊から音楽記事を抽出し考察された。演奏機会や歌の分析、音楽が果たした機能や役割および変遷にまで検討が及んだが、傍聴者が興味を持ったのは本史料から吉原における音曲の流行が読み取れるという点だった。すなわち寛政以前には長唄、河東節、義太夫

節が、寛政末からは新内節、荻江節、いたこ節の流行が窺われるとのことで、洒落本を通読してきた発表者ならではの見解が示された。会話体の中に出てくる音楽に関する記述(曲、歌、人物等)も細やかで具体的であったが、実際の程度特定できるものなのか(あるいはパロディなのか、文学的修辞に止まるのか)という考証が十分でなかったため、本史料の持つ虚構性を払拭できない印象があった。吉原の音楽文化の実態解明には、発表者も述べていたように、実証性の高い史料を援用して照合・精査することが求められよう。今後を期待したい。

前島美保

大正期大阪における箏曲点字楽譜解説書の成立

発表者：村山佳寿子

村山氏の発表は、盲人箏曲家宮城道雄が使用していた点字の解説書の成立状況を詳らかにするものであった。宮城が点字楽譜の拠り所とした解説書の調査は、20世紀初頭にはまだ珍しかった箏曲の手稿譜を研究する前提として必要不可欠であり、興味深い。しかも宮城が用いていたのは、講師を務めた東京盲学校ではなく大阪市立盲学校の解説書であった。村山氏は、丹念な資料調査の結果、成立経緯とその特徴、宮城と解説書の接点をも浮き彫りにした。個人的には、西洋音楽の用語と箏曲の手法を絶妙に結びつけた手法記号の設定に感心するとともに、宮城がわざわざ大阪の本書を選んだ理由も納得できた。フロアからは、他の盲学校で使用されていた解説書について質問があり、箏曲の職業教育を行っていたのは全国で4校だけであったこと、京都では資料が見つからなかったという回答がなされた。点字を読みこなし、緻密に資料を扱う姿勢に感服した。今後の点字の資料研究に期待したい。

福田千絵

大正時代に来日した外国人演奏家—エルマンをめぐる動向を中心に—

発表者：越懸澤麻衣

越懸澤氏の発表は、ロシア人ヴァイオリニスト、ミッシャ・エルマンによる日本の帝国劇場を中心とした公演の経緯と影響を明らかにするものであった。20世紀初頭に数々の著名な外国人演奏家が来日公演を敢行した中で先駆けとなったエルマンの訪日に湧く様子、公演の詳細、その後のレコード発売や楽譜出版などの公演の産物についても詳しく調査されており、当時の音楽愛好家の熱気を大いに感じさせる内容であった。また、その興行が、他の演奏家に共通するものであったという点は興味深かった。フロアから、日本に至る旅行経路、興行主、同行者等、旅行のマネジメントについて複数の指摘があったが、これは、近い分野の研究者が集う全国大会ならではの収穫といえると思う。当時、来日演奏家が日本の楽壇に与えた影響は計り知れず、当時の音楽状況について、この

ような考察から導き出されることは多いと思われる。今回のように焦点を絞った研究を積み重ね、当時の来日公演の全体像が明らかになることを期待したい。

福田千絵

◇研究発表2-B

タブラーとジョーリーのレパートリーについての比較考察

発表者：井上春緒

先行研究において、北インドの古典音楽を代表する打楽器タブラーの前身はパカワージと説明されてきた。しかし両面太鼓のパカワージと垂直に置いて演奏されるタブラーでは形態が大きく異なっている。そこで発表者はパカワージからタブラーへ変容していく過程にパンジャブ州のシク教徒によって継承されている太鼓ジョーリーがあると過程し、楽器の構造、演奏法の比較分析を行った。考察の結果、ジョーリーの形状はタブラーに似ているが、音域はタブラーより低く、パカワージに近い。またジョーリーとタブラーのリズム型は相互に影響しあっているが、レパートリーはそれぞれ独自のものが多く等の特徴を述べ、北インドの古典音楽の太鼓はパカワージ、ジョーリー、タブラーという順番で発展したという根拠を示した。フロアからは、西アジアの楽器の影響や、図像学的観点から研究を行い、本研究の更なる発展を望む声があがった。

鈴木良枝

時代を先駆けた二人のインド女性芸能者の近代

発表者：田森雅一

本研究はコロニアズムやナリョナリズム、ジェンダー、売春等の関係性の中で過小評価されてきた北インドの女性芸能者の存在と技芸を見直し再検討を試みた。特に発表では近年、再評価されている女性芸能者二人の活動に焦点を当てた。一人目はタワーイフと呼ばれる女系芸能集団出身であるゴウハル・ジャーンである。彼女は声楽や舞踊に秀で、インド女性として初めてレコーディングを行なったが、英領インド期にタワーイフは売春婦と同一視されたため、公共放送で取り上げられなくなった。一方、高いカースト出身であるマダム・メナカはカタック舞踊を基盤にしたダンス・ドラマを創作し、西洋での公演を成功させ、女性芸能者から売春婦という汚名の除去に貢献した。しかし48歳で急逝したことにより、その成果は忘れられた。発表者は今後の展望として、インドにおける国民文化の形成の際に世襲女性芸能者が排除されたプロセスや、二人の女性の技芸の実態の検証が必要であると述べた。

鈴木良枝

在沖縄インド人コミュニティの宗教歌謡—その形態と旋律—
発表者：小日向英俊

本発表は在沖縄インド人コミュニティによって建立されたヒンドゥー寺院で行われる集会や儀礼の実践例を紹介し、宗教歌謡バジャンの旋律の分析結果を報告した。沖縄県の嘉手納基地周辺に住んでいるインド人の多くは、シンドゥ地域から移住したといわれている。シンドゥ地域はヒンドゥー教とシク教の混濁的状态が見られる地域で、沖縄のヒンドゥー寺院にもその混濁の状況が見られた。更に寺院には現代の聖者サッティヤ・サーイ・サイババの写真も祀られ、日本人の帰依者たちも定期的に集まりバジャンを歌う会が催されていた。本発表では沖縄市で行われたバジャンの会の進行状況に触れ、そこで歌われる楽曲を分析し、基本的に音頭一同形式、リズム楽器のみの伴奏で歌われるなどの結果を示した。発表者より同寺院で歌われる旋律型がヒンドゥー教のバジャンの典型的なものか、シク教のキールタンの要素が強いのか、分析を続け明らかにすることが今後の課題として示された。

鈴木良枝

◇研究発表2-C

【共同発表】

琉球箏曲歌物の形成と関連歌の広がり

発表者代表：金城厚

発表者：井口はる菜、遠藤美奈、比嘉悦子

本発表は、琉球箏曲の歌物3曲《船頭節》《対馬節》《源氏節》について、他の様々な歌謡や民謡との関係を明らかにしようとしたものであった。最初に、代表者の金城氏より、先行研究や今回の研究の概要について説明があり、続いて、井口氏・金城氏・遠藤氏・比嘉氏の順で、研究成果の報告があった。

井口氏の報告は、類似した歌詞を持つ歌謡の分布を調査したものであった。《船頭節》には33の類歌があり、特に鹿児島県の大隅半島に類歌が集中していること、《対馬節》には12の類歌があり、三宅島や八丈島にも分布していること、《源氏節》には7の類歌があり、御船歌との関係が明らかであること等が報告された。

金城氏の報告は、《源氏節》と御船歌との音楽的なフレーズの構造を分析したものであった。歌詞の区切り・繰り返し・転倒、囃子言葉や間奏の位置等から比較すると、両者には共通点が多く、同じ構造を持つ同型旋律のヴァリエーションの関係にあると考えられることが報告された。

遠藤氏の報告は、井口氏の調査した《船頭節》の類歌のうち、採譜可能な12の音源について、歌詞の当てられた音のみを拾い出す「歌詞音列法」を用いて旋律の骨格となる音列を抽出し、さらに音高音列分析ソフトを用いて各類歌の音列

の類似度を比較したものであった。沖縄県伊江島の類歌を除くと、鹿児島県大隅半島付近の類歌が最も近い関係にあること等が報告された。

比嘉氏の報告は、琉球箏曲の本土からの伝来の時期について再考したものであった。稲嶺盛淳が箏曲を習ったと伝えられる薩摩の服部清左衛門政真・武右衛門父子については、九州大学の石本家文書を参照すると、琉球とも関連のある同名の商人が1800年代に実在したこと、しかし年代的には矛盾すること等が報告された。

会場からは、船頭節の類歌の奄美での分布や、投節との関連についての指摘、歌詞と旋律の類似度はどの程度相関するか、類歌は箏の伴奏で歌われているのか、等の質問があった。最後に、金城氏より、今後の課題や展望についての言及があった。

発表題目に「広がり」とあるように、類歌の分布の背景には、江戸時代における海運業の発展や琉球と日本人の交流など、様々な事象があったであろうことを想像させる、スケールの大きな発表であった。今後、第二弾があると聞いているので、期待したい。

高瀬澄子

◇研究発表3-A(司会：井口淳子)

植民地朝鮮における「俗謡」をめぐる日本人の音楽学的認識—1910年～1920年代の日本語文献を手掛かりに—

発表者：金志善

「民謡」という語がまだ流通していない1910～20年代に朝鮮で民謡を調査した兼常清佐と石川義一の事績から、当時の朝鮮民謡の実態と日本人研究者の認識が考察された。1911年の兼常の調査は専門唱者による通俗民謡を中心とし、1913年の『日本の音楽』では妓生の歌う「歌・詞・調・謡」のうち娼妓の専門物と見なした「謡」を、野卑だが日本の俗謡(民謡)に遜色のない立派なものとして評価した。1921年から30年代まで朝鮮総督府の囑託として民謡を調査した石川は、1921年には兼常の認識に影響され妓生の歌う民謡・雑歌を「朝鮮俗曲」と捉え社会教化の手段と位置付けたが、1923年には済州島・鬱陵島で郷土民謡を採集しその価値を評価した。採譜を含む両者の事績は朝鮮民謡の音楽調査の先駆となる。発表に際し30頁に及ぶ論文が配付されたが、調査当時の用語と実態との関係整理や論点の絞り込みなど、20分の枠内で得心させるための工夫があってもよかつたのではないかと。

塚原康子

戦時下の唱歌普及の取り組みとその成果—唱歌《日本のあしおと》を題材に—
発表者：丸山彩・酒井健太郎

丸山・酒井両氏によるアジア・太平洋戦争期の唱歌《日本のあしおと》に関する共同発表。趣旨説明後、酒井氏より、

「ザックザック」という特徴的な擬音で始まる《日本のあしおと》が1942年2月11日の日本少国民文化協会発会式で発表され、同協会のテーマソングのような位置づけにあったこと、全国少国民「ミンナウタへ」大会や国民皆唱運動、南方版を含む『ウタノエホン』発行等を通じた普及活動の経緯が報告された。丸山氏からは、内地での認知・普及度を測るための、当時の少国民(1922~38年生れの80名)を対象とするアンケート調査結果が示された。当該曲を含む17曲を「歌える1/歌ったことがある2/聴いた3/聴いたことがある4/全く知らない5」で5段階評価した結果は《日本のあしおと》が『ウタノエホン』所収10曲では最高の4.56で、「歌われていたが普及には至らなかった」と結論づけた。《隣組》1.63などとの差異の要因が知りたいところである。

塚原康子

北米における「Buddhist Temple Music」としての尺八イメージ—玉田如萍の活動を中心に—

発表者：マット・ギラン

近年、尺八の宗教的イメージの由来を探究しているギラン氏が、1920~60年代に北米で活動した尺八家・玉田如萍の事績を、雑誌『三曲』と北米の邦字新聞記事38点、NY公共図書館蔵のヘンリー・カウエル宛の玉田書簡41点に基づき(玉田宛のカウエル書簡は所在不明の由)詳細に紐解いた。玉田は1918年渡米し、日系人社会で主に三曲合奏を行っていたが、1930/31年の一時帰国時に神如道に入門後、普化尺八に傾倒する。北米で禅を普及していた千崎如玄らと交友し、東漸禅屈での法要や催し等に古典本曲を奏したことで、Buddhist temple musicとしての尺八イメージが強まる。おそらく千崎を介して1934年頃カウエルと出会い、翌35年初の尺八本曲演奏会が開催されるが、その企画はジョン・ケージが担当した。カウエルらの反応により尺八イメージが変わり、北米における日系人社会を越えた尺八ブームの端緒となった点で、玉田の活動の重要性が実感された。続報を期待する。

塚原康子

◇研究発表3-B (司会久万田晋)

佐賀県内における鉦を用いる浮立の分布に関する一考察—鉦の音楽構造を通して—

発表者：古澤瑞希

セッション3-Bでは、若手の研究者による、民俗芸能・社寺芸能と関わりをもつ3件の発表がなされた。

古澤氏の発表では、会場に流れた鉦浮立(多声部型)のサウンドとテクスチュアに驚かされた。まるでガムランである。発表者は質疑のなかで両者に直接の関係はないだろうと述べたが、分析における周期、インターロック、節目(コロトミ)といった用語法は、発表者がガムランの構造を念頭にお

いていることを物語る。分析の結果示された類型ごとの分布状況はよくわかったが、そうした分布が生じた理由とともに、この音楽に対する担い手の認知構造などについても、発表者の見解が聞きたかった。

植村幸生

民俗芸能の音楽におけるモチーフの分布調査とその結果—東日本篇—

発表者：川崎瑞穂

川崎氏の発表は、日本の民俗芸能に共通の旋律型ないしリズム型が認められることに注目し、これまで発見されたその共通要素を「モチーフ」としてその分布と現われを調査する、という研究の中間報告であった。発表のなかほど、発表者が「歴史(伝播)が問題ではなく形態が問題である」と発言したところで、発表者が構造主義的な発想を前提としていることを知る。「モチーフ」とその変換を手掛かりに、日本の民俗芸能にいわば「野生の思考」を見出そうという目論見は大胆で興味深い(「その研究のためには日本から出るべきでは」というフロアからのコメントはこの研究の特徴を言い当てている)が、「モチーフ」概念を最後まで定義しないまま、しかも歴史的カテゴリーを引きずった名称をモチーフに与えながら、発表者と前提を共有しない聴衆にその目論見を理解させることは困難だったのではなかろうか。

植村幸生

近現代日本における「作曲」/「作品」概念の再考—柴田南雄《修二會讚》より—

発表者：仲辻真帆

仲辻氏は《修二會讚》(1978)同作品の創作過程(構想段階でのメモ、採譜、自筆譜等の資料研究を含む)、作品の構成および修二会素材の使用法、修二会に対する柴田の発言をそれぞれ検討し、本作品が音楽について語る音楽(メタミュージック)として設計された(という意味でカッコつきの)「作品」であったと主張した。本発表は「作曲」/「作品」概念の再考、というタイトルを付しているが、その「再考」の主体は柴田なのか、それとも発表者なのか。結論を読み直すと前者のようであったようだが、だとすれば柴田のシアターピースに対する従来の指摘に、この《修二會讚》研究が何を付け加えたかが知りたいところである。さらに言えば、本作と対をなす(と発表資料にも記された)《布留部由良由良》との関係についてもひとこと言及がほしかった。

セッション3-Bの3件の発表はいずれも、構想から調査へと進めつつある萌芽的研究の経過報告の色彩が強かった。こうした発表では質疑応答と討論がこのほか重要となる。研究の大きな構想と背景を簡潔に説明するなどして、発表者が活発な質疑を自ら「呼び込む」ための工夫があるとよいと思った。

植村幸生

◇研究発表3-C

[セッション]

民衆的楽器のあり方—ユーラシアの有棹撥弦楽器を比較する

発表者代表：柚木かおり

発表者：東田範子

米山知子

本発表は、「民衆的楽器」及び「有棹撥弦楽器」を共通項とし、三つの考察テーマに沿って文化学者の柚木がロシアのバラライカ、文化人類学者の米山がトルコのパーラマ、音楽学者の東田がカザフスタンのドンブラについて報告を行った。

第一のテーマは、各楽器の親しみやすさや簡単様についてである。柚木の発表では、バラライカの演奏文化は主に調弦の違いから農村型の民俗バラライカと都市型のコンサート・バラライカに大別され、演奏の場や演奏形態、時代的変遷、国の介入の有無等によって更に6種に細分化可能なことが説明された。その上で、親しみやすさや簡単な楽器と呼ばれる由縁について、歌唱や踊りの伴奏楽器としての簡易な奏法や親しみやすいレパートリーといった一部の事例が示された。一方、米山や東田の発表では演奏される場に着目し、パーラマは可動フレットによって様々な地域の民謡の伴奏が可能であることから民謡酒場で広く用いられてきたこと、またドンブラは親族等が集う私的な会食の場において語りと共に発展してきた演奏文化であることが、民衆的楽器としての親しみやすさに繋がっていると、貴重な映像資料とともに紹介された。

第二のテーマは演奏時の姿勢であり、演奏の場や楽器が採用されるジャンルが多様化する中で、立位、床への座位、椅子への座位という視点から各楽器の事例が示された。最後の第三のテーマはポピュラー音楽での使用についてである。現在では三楽器の何れも様々なポピュラー音楽に採用され、中でもパーラマの場合は拡声機能を内蔵したエレクトロサズ、ドンブラではエレクトロ・ドンブラの登場など、演奏するジャンルに適合するような楽器改造の事象も見られる。これに関してはフロアから、民衆的楽器のポピュラー音楽への導入に対して否定的な動向はないのかという質問があったが、各楽器の共通点として、従来の後進性・ノスタルジックなイメージから、現代ではクールな楽器へと楽器をめぐる表象にも変化が起きていることが確認された。

本発表の意義は、隣接分野の研究者らが複数の異なった観点から問題意識を出し合い、各事例を紹介しながら比較考察の視座を提供したことにある。限られた発表時間に対して提示された内容が多く、結果としてフロアからの質問・意見が少なく活発な議論には至らなかったが、楽器学の視点からこうした比較研究は大変重要であり、今後の共同研究の発展に大いに期待したい。

岡田恵美

◇研究発表4-A(司会：遠藤徹)

『三五要録』と『仁智要録』における唐楽曲の形式について

発表者：李小艾

※発表者の都合により中止

宮内庁書陵部蔵『歌楽維譜』

発表者：根本千聡

本発表は、ほとんど手つかずとなっている『歌楽維譜』の資料価値を、書誌学、音楽史学、古楽譜分析等、多方面からの検討によって説いたものである。特に、資料の大部分を占める笛譜、琵琶譜に焦点をあて、譜の内容や記譜体系、琵琶の調絃法等をふまえ、その内容の多くが10世紀の資料に依拠したものであるとした。伏見宮家旧蔵楽書研究の現況についても言及があり、総じて問題提起に富んだ発表となった。質疑応答によって、①歌謡関連記事の検討、②他譜との詳細な比較分析、③書誌学的検討などの課題が確認された。特に①については発表者の言及がほとんどなかったが、本資料には、神楽歌、催馬楽、東遊歌の詞章、踏歌次第など、本資料の編纂過程を考える上でも、また歌謡研究の観点からも看過できない重要な記事が多く含まれている。資料名よろしく、歌と楽とを維(つな)いだ分析が求められよう。他人を俟たず、まずは発表者自身の見解をお示しいただきたい。遠慮は無用である。

本塚亘

◇研究発表4-B(司会：南谷美保)

真言声明南山進流に於ける「思想上の理論」と「実唱上の理論」の併存—時代ごとの呂律観を見る—

発表者：吉岡倫裕

本発表は、真言声明の南山進流を対象に、呂音階と律音階の違いが、書記記録による「思想上の理論」と実践による「実唱上の理論」で矛盾していることに着目し、これが意味するところを考察した内容であった。

思想上の理論では、呂・律の構成音の違いと、転調による音高の違いの2点を指摘した。その上で、実唱上の理論では鈴木智辯の『声明大全解説』と鈴木自身による録音を基に発表者の見解を述べた。それによると、実唱上と思想上が明らかに乖離しており、また、そもそも実唱上では呂・律の構成音の違いも意識していないということであった。こうした実情は、一時期研究者の間で口頭伝承のミスと評価されてきた。しかし、時代を遡ると、南山進流の発生期から既に乖離があることが書記記録から明らかであり、発表者は本音と建て前のように整理すべきであると提言した。

フロアからは、思想上の理論の存在意義や、より広い視野で雅楽との関連について問う意見があった。今後、それらを検討することにより、さらに研究の進展が期待されるが、何

よりも封建的な僧侶の世界においては、発表者の今後の未永い研究の持続とその成果の発信が求められよう。

星野和幸

徳川吉宗の琴楽再興—実践と思想の結節点—

発表者：山田淳平

本発表は、広く知られる徳川吉宗の琴楽再興について、その状況とその後の受容について注目した内容であった。現時点で既に史料に基づく先行研究がある中、ここではさらに国立歴史民俗博物館所蔵の「南都楽人辻家資料」から検討された。

そもそも、吉宗は雅楽に非常に関心があったことが背景にあり、まず吉宗の政権下にいた黒田直邦という人物を介して、辻家と荻生徂徠が交流をもち、黒田・徂徠のラインで琴の研究が進行していたとみられることが指摘された。

享保20年には、琴御用掛りとなっていた黒田のもとで、楽人や儒者などの協業により琴楽が再興されたものの、その後は朝廷でも幕府でも定着せず、紅葉山楽人や一部の武家によって存続された。しかし、発表者は、一時的ではあっても幕閣のもとで楽人や儒者の協業で実現された事業であったことは確かであり、それは実践と思想の1つの結節点になったと結んだ。

質問者からは、朝廷と幕府の権力関係を問われたが、当時両者が協調関係にあったことを指摘した。また、幕府に琴譜を献上した辻家と箏譜を献上した四辻家との関係も問われたが、この点に関しては今後の検討課題となろう。

星野和幸

◇研究発表：4-C (司会：植村幸生)

日本で発掘された平安期の鉄製口琴

発表者：直川礼緒

発表者は口琴を、ユーラシア地域を中心に広く分布する気鳴楽器とし、薄板状の口琴と湾曲状の口琴に大別した上で、ユーラシア地域における両者の考古学的な発掘例をあげ、日本で発掘された口琴の位置づけを考察した。薄板状の口琴は日本では発掘例がないが、中国・ロシア・ヨーロッパ等でBC20世紀を最古とする骨あるいは青銅製などのものが発掘されている。それに対し湾曲状のものは、沿海地方で発掘されたAD5世紀のものを最古とし、日本でも大宮市、羽生市、木更津市でAD9～10世紀のものが発掘されている。ヨーロッパではAD12～13世紀以降のものが数多く発掘されている。ちなみに、口琴はそうとは同定されていないケースも多いが、杵部分の断面がひし形状で角が弁の方向を向いていること、杵の側面の形がわずかに「へ」の字の湾曲をもつことなどが同定の決め手となるそうだ。発表者は、日本のものが、

沿海地方・黒竜江省で発掘されたAD5世紀～12世紀のものと関連付けられることを示唆した。発表者は口琴の世界的な分布と関連を明らかにしようと努力している。さらに多くの事例が積み重ねられ、その全貌が明らかになっていくことに期待する。

福岡正太

伊勢大神楽の回壇における笛の機能

発表者：神野知恵

発表者は、西日本各地において伊勢大神楽講社による回壇に密着し調査を続けている。この発表では笛の「機能」について考察した。伊勢大神楽に用いられる笛は神楽師自身が製作するのを常とする。笛の音は神楽師の到来を知らせ、清めに用いられることに加え、村の中を分かれてめぐる神楽師たちのあいだで、さまざまな情報を伝達する符牒として使われていること、また、神楽師が回壇先で笛を教えたり、笛を譲渡したりすることで伊勢大神楽の伝播の中で大きな役割を果たしていることも報告された。発表者は、こうした事例を踏まえ、神楽師にとって笛が「通知的、信仰的、記号的、音楽的、物理的」機能をもっていると論じた。また、回壇地側にとって、笛の音は大神楽の象徴となり、神楽師が廻ってくる季節や、大神楽を迎えた高揚感や思い出等とも結びつけられていることが明らかにされた。豊富な調査事例に基づく報告は、伊勢大神楽のおもしろさを存分に伝えるものだったが、「機能」は多分に印象論的であり、分析概念として用いるためには、方法論として議論を深めていく必要があると感じられた。

福岡正太

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2019年9月28日(土)に江東区文化センター第2会議室において一般社団法人東洋音楽学会の第15回通常理事会が、2019年11月16日(土)に京都市立芸術大学において第8回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細は、後掲の第8回定時社員総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照ください。

1) 新入会員について

理事会において、2019年4月以降に仮承認された正会員8名と学生会員1名が、会員として正式に承認されました。

2) 参事委嘱について

武田有里氏に東日本支部の参事を、古澤瑞希氏に西日本支部の参事を委嘱することが承認されました。また、東日本支部参事であった鈴木麻菜美氏について、田邊尚雄賞選考委員会の参事への担当変更が承認されました。いずれも任期は、本理事会が解散する2020年に開催される総会までとなります。

3) 平成30年度公益目的支出計画実施報告書について

社団法人から一般社団法人への移行が完了するまで提出が義務づけられている公益目的支出計画実施報告書について、平成30年度の報告書の内容が承認されました。

前会長・塚田健一氏を悼む

2005年度から2006年度にかけて本学会の会長をつとめられ、今期は監事の職につかれていた塚田健一氏が、本年11月6日に、69歳で亡くなられた。この9月に、病氣療養のため監事の職を辞したいとお申し出を受けた矢先のことであった。ここに、故人のこれまでのご功績と学会への多大な貢献に敬意と感謝を表し、謹んでご冥福をお祈りする。

本学会役員およびICTM担当委員として、塚田氏は一貫して若手研究者の育成、そして日本の音楽学の国際化に尽力された。とりわけ、1999年8月に、塚田氏の勤務先である広島市立大学で開催されたICTM第35回大会は、日本の音楽学の世界的なプレゼンスを高めたいという氏の熱い願いの結晶であった。また、推薦者の制度を廃止して新規入会への敷居を下げたのも氏の提案であったと記憶している。

塚田氏は日本、米国、英国を代表する民族音楽学者、すなわち小泉文夫、アラン・メリアム、ジョン・ブラッキングのもとで学ばれた。そして日本では数少ないアフリカ音楽研究の専門家として、この分野を開拓し、その音楽の魅力と奥深さを紹介する役割を果たされた。『アフリカの音の世界』(新

書館、2000年)『スコラセレクションズ アフリカの伝統音楽』(CD、坂本龍一と共編、エイベックス、2012年)『アフリカ音楽学の挑戦：伝統と変容の音楽民族誌』(世界思想社、2014年、第32回田邊尚雄賞)『アフリカ音楽の正体』(音楽之友社、2016年)などがそれである。今年3月には『エイサー物語：移動する人、伝播する芸能』(世界思想社)を出版されたばかりであった。

塚田氏の文章は常に、魂の底から音楽を、人間を語らずにはいられない情熱と信念に溢れている。それは学生や若手研究者に向き合う時にも変わることはなかった。時に厳しく批判し、時に暖かく励ます氏の言葉と語り口を記憶に止める当時の学生たちは多いことだろう。そして、著書『文化人類学の冒険』(春秋社、2014年)のエピローグにも綴られている凄まじい闘病のさなかに上記の著作を立て続けに発表された氏のエネルギーに、あらためて驚嘆させられる。

氏が師事した偉大な3名と同様に、塚田氏もまた、志なげにしてこの世を去られた。いま残された我々はその遺志を継ぐべき時である。合掌 植村幸生

会報・支部だより等の送付方法に関するアンケートにご協力ください

近年、学会の財政状況が厳しく、赤字決算が続いています。会費値上げを行わずにこの状況を解決するためには、支出の大幅な抑制が必要です。その方策のひとつとして、学会から会員のみなさまにお届けしている会報や支部だよりや例会通知などをメールやウェブサイトでの配信(必要に応じて限定アクセス)に移行することを検討しています。他の学会でも経費節減のために同様の変更を実施したところが多数あり、また本学会でも沖縄支部ではすでに『沖縄支部通信』の郵送を停止してメールによるPDFファイル配信および沖縄支部のウェブサイトから閲覧する形をとっています。

現在検討中のこの変更に関してぜひご意見をお寄せください。大会に参加した方には会場アンケート用紙を配付し49名の方が回答していただきましたが、大会に参加されたなかった会員の方々からもご意見を伺いたいと思います。同封のアンケート(黄色の用紙)にご記入の上、①学会事務所に郵送、②学会事務所にFAX送信、③スキャンまたは写真にとり学会事務所にメール送信、のいずれかの方法で用紙をご提出ください。集計の都合上なるべく2月初旬までにご回答をお願いします(それ以降に頂戴した回答も検討材料として活用しますので、どうぞご送付ください)。まことに恐縮ですが、経費節減のため郵送料はご負担ください。ご協力よろしくお願ひいたします。

第37回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第37回田邊尚雄賞選考委員会では、同賞の選考にあたり、推薦情報を募集しております。アンケート締切まであと僅かとなりました。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、皆さまからの積極的なアンケート送付を切望いたします。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象：2019年1月1日～12月31日の発行物

アンケート締切：2020年2月7日(金)正午

記入事項：著者名、書名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数も記してください。推薦理由を簡潔にお書き添えていただいても構いません。

送付先：東洋音楽学会 第37回田邊尚雄賞選考委員会
(郵便)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号
(FAX) 03-3832-5152
(電子メール) LEN03210@nifty.com

選考委員：近藤静乃(委員長)、配川美加、前原恵美、小西潤子、伏木香織

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど

1. 会費納入のお願い

2019年9月から新しい年度(2019年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払込くださいますよう、お願い申し上げます。振込用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振込ください。

正会員：8000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行 [口座番号] 00160-6-55723 [加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行 [支店名] 〇一九(ゼロイチキョウ)店 (019) [当座] 0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済で会費が納入でき

るようになりました。学会ウェブサイトのトップページ(<http://tog.a.la9.jp/>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧くださいと納入ボタンがあります。オンライン決済にはペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済には手数料が発生するため、納入金額は以下のようになります。

正会員：8350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士課程)・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ(<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>)でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願い」と学生証のコピーを、また研究生の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願い」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願い」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

東日本支部からのお知らせ

◇定例研究会発表募集(7月例会)

2020年7月4日(土)に開催される東日本支部定例研究会での研究発表を募集しています。

発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、4月30日までに、東日本支部事務局あて、お申し込みください。

なお、発表希望をご提出後1週間経過しても事務局からの

連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

◇「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法などの詳細は、『東日本支部だより』の最終ページをご覧ください。

[東日本支部事務局]

〒110-0005 台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail : tog.higashi@gmail.com

沖縄支部からのお知らせ

◇定例研究会について

沖縄支部では、第73回定例研究会を2020年2月16日(日)沖縄県立芸術大学で開催します。詳細は、沖縄支部ホームページをご覧ください。沖縄支部ホームページには、過去の定例研究会の報告内容について掲載した『沖縄支部通信』をアップロードしておりますので、ぜひご覧ください。

沖縄支部ホームページ

<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>

また、第74回定例研究会の開催予定は2020年6月です。発表希望者を随時受け付けております。他支部会員の発表も歓迎いたします。学会員以外の方々も聴講可能ですので、学生さんや関心のある方々への参加呼び掛けもよろしく願っています。発表を希望される場合には、開催予定の4か月前までをめぐりに、下記の沖縄支部事務局までご連絡ください。

沖縄支部事務局：

〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4

沖縄県立芸術大学音楽学部

東洋音楽学会沖縄支部長 小西潤子 宛

電話・FAX: 098-882-5016

電子メール : konisij@okigei.ac.jp (小西潤子)

ICTM(国際伝統音楽学会)に関するお知らせ

第46回 ICTM 世界大会のお知らせ

日時：2021年7月22日～28日

開催地：Institute of Ethnomusicology - Center for Studies in Music and Dance, および NOVA School of Social Sciences and Humanities, New University of Lisbon (NOVA-FCSH)
(ポルトガル、リスボン)

テーマ

1. Ecomusicologies and Ecochoreologies: Sound, Movement, Environment
2. Dance, Music, and Human Rights: Coexistence and Inequalities in the Contemporary World
3. Approaches to archival practices
4. Connected Communities: Ocean Trajectories and Land Routes
5. Music and Dance Cosmopolitanisms
6. Music and Dance Industries
7. New Research on Other Topics

発表募集についてのお知らせは、2020年1月号のICTM会報 (*Bulletin of the ICTM*) に掲載されます。ICTM会報は、ICTMのウェブサイト(以下URL)から閲覧できます。
(<http://ictmusic.org/publications/bulletin-ictm>)

会員異動

個人情報のため削除

個人情報のため削除

個人情報のため削除

図書・資料等の受贈

(2019年9月～11月、到着順)

- 『日本音楽学会会報』第107号
 『音楽学』第65巻1号 日本音楽学会
 『越中おわら風の盆の空間誌——<うたの町>からみた近代』
 長尾洋子、ミネルヴァ書房
 『楽道』9,10,11月号 (公財)正派邦楽会
 『雅楽だより』第59号 雅楽協議会
 『民俗芸能研究』第67号 民俗芸能学会

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物、価格(税込))

- 『アメリカン・マインドの音声= The Soundscape of the American Mind: 文学・外傷・身体』下河辺美知子(監)、高瀬祐子・他(編著)、小鳥遊書房、3,300円
 『生田流の箏曲(改訂版)』安藤政輝、講談社エディトリアル、6,820円
 『オットー・クレンペラー最晩年の芸術と魂の解放——1967～69年の音楽活動の検証を通じて』中島仁、鳥影社、2,365円
 『音楽科教育とICT』深見友紀子、小梨貴弘、音楽之友社、2,200円
 『音楽化社会の現在——統計データで読むポピュラー音楽』南田勝也・他(編)、新曜社、2,750円
 『音楽教育研究ハンドブック=Handbook of Music Education Research: 日本音楽教育学会設立50周年記念出版』日本音楽教育学会(編)、音楽之友社、2,970円

- 『音楽・芸能事典2014-2018』日外アソシエーツ(編)、日外アソシエーツ、21,450円
 『音楽の憎しみ』パスカル・キニャール(著)、博多かおる(訳)、水声社、2,750円
 『音楽風土記『さつま』薩摩の音楽芸能史・夜話: 薩摩と琉球 戦国期から江戸幕末期まで: 久保けんお遺稿二』久保けんお(著)、久保けんお顕彰会(編)、久保けんお顕彰会、1,500円
 『雅楽事典 新装版』小野亮哉(監)、東儀信太郎・他(著)、里文出版、17,600円
 『歌舞伎(知っておきたい日本の古典芸能)』瀧口雅仁(編著)、丸善出版、2,200円
 『感じる』入野野宏・綿村英一郎(編)、大阪大学出版会、2,200円
 『義太夫年表 昭和篇第五巻 昭和三十六年～昭和四十五年』国立文楽劇場義太夫年表昭和篇刊行委員会(編)、和泉書院、20,900円
 『京城日報音楽関連記事・広告目録集』=경성일보 음악관련 기사·광고 목록집: 1909-1945』金志善(編)、民俗苑、9,000円(送料込)
 『ケルトの魂——アイルランドから日本へ: 鶴岡真弓対談集』鶴岡真弓、平凡社、3,960円
 『心ひらくピアノ——自閉症児と音楽療法士との14年』土野研治、春秋社、2,420円
 『古代寺院の芸術世界』肥田路美(編)、中安真理・他(著)、竹林舎、15,400円
 『指揮者の使命 音楽はいかに解釈されるのか』ラルフ・ヴァイケルト(著)、井形ちづる(訳)、水曜社、2,420円
 『指揮者は何を考えているか——解釈、テクニク、舞台裏の闘い』ジョン・マウチェリ(著)、松村哲哉(訳)、白水社、3,300円
 『ジャズの「ノリ」を科学する』井上裕章、アルテスパブリッシング、1,980円
 『真実なる女性 クララ・シューマン』原田光子、みすず書房、5,720円
 『静寂から音楽が生まれる』アンドラーシュ・シフ(著)、岡田安樹浩(訳)、春秋社、3,300円
 『ソ連歌謡——共産主義体制下の大衆音楽』蒲生昌明、バブリブ、2,530円
 『旅する作曲家たち』コリンヌ・シュネデール(著)、西久美子(訳)、アルテスパブリッシング、2,640円
 『中華圏の伝統芸能と地域社会』石光生・他(編著)、好文出版、3,850円

- 『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ—明治・大正・昭和初中期』 松村直行、和泉書院、2,860円
- 『日本古代音楽史論』 荻美津夫、吉川弘文館、12,100円
- 『日本の音楽図書館=Music libraries in Japan : 音楽図書館協議会40年のあゆみ』 音楽図書館協議会40年史編集委員会(編著)、大空出版、6,820円
- 『日本目録規則2018年版典拠データ完全実例集=NCR 2018-complete examples (authority) : 音楽とその周辺』 鳥海恵司(編著)、鳥海恵司、2,000円
- 『能・狂言における伝承のすがた』 東海能楽研究会(編著)、風媒社、2,750円
- 『フルトヴェングラーとカラヤン—クラシック音楽に未来はあるのか』 小川榮太郎、啓文社書房、3,300円
- 『平安朝音楽制度史』 荻美津夫、吉川弘文館、12,650円
- 『ベートーヴェン 完全詳細年譜』 大崎滋生、春秋社、8,800円
- 『ベートーヴェン—心の楽譜にえがく希望のメロディ』 新井鷗子、音楽之友社、2,420円
- 『本物の思考力を磨くための音楽学 —「本質を見抜く力」は「感動」から作られる』 泉谷閑示、ヤマハミュージックメディア、1,760円
- 『まちあるき文化考—交又する〈都市〉と〈物語〉』 渡辺裕、春秋社、2,640円
- 『ミュージックオブジャパントゥデイ : 第6回国際日本音楽学会フェスティバルレポート』 田野崎和子、E・マイケル・リチャーズ(共編)、芸術現代社、2,200円
- 『モーツァルト—心に魔法をかける奇跡の音楽』 新井鷗子、音楽之友社、2,420円
- 『求むマエストロ。瓦礫の国の少女より イラク・ナショナル・ユース・オーケストラの冒険』 ポール・マカラングン(著)、藤井留美(訳)、アルテスパブリッシング、2,750円
- 『ものがたり西洋音楽史』 近藤譲、岩波書店、1,100円
- 『湯浅譲二の音楽』 ルチアナ・ガリアーノ(著)、ピーター・バート(編)、小野光子(訳)、アルテスパブリッシング、4,180円
- 『ワーグナーシュンポシオン 2019』 日本ワーグナー協会(編)、アルテスパブリッシング、3,190円

新発売視聴覚資料

●CD

- 『新井甚句／島芝翫節(新民謡)』 藤みち子、門脇弘子、VZCG-10580、1,320円
- 『今藤政太郎作品集六 一京—(創作邦楽・長唄)』 今藤政太郎、今藤文子・他、VZCG-822、3,300円
- 『ザ・ベスト 沖縄のうた』 伊波智恵子、伊波みどり・他、COCN-60068、1,980円
- 『中島勝祐創作賞 第八回 狐狸廓化競』 東音高橋智久、中島勝祐、VZCG-826、3,300円
- 『ザ・ベスト 七代目芳村伊十郎 長唄名演さわり集』 七代目芳村伊十郎・他、COCN-60072、1,980円
- 『ザ・ベスト 二胡のしらべ～蘇州夜曲・ハナミズキ～』 姜建華・他、COCN-60070、1,980円
- 『ザ・ベスト 日本の民謡～北海道・北東北編～』 外崎繁栄・他、COCN-60062、1,980円
- 『野澤徹也／杵屋正邦作品集』 野澤徹也・他、VZCG-824、3,300円

●DVD

- 『第二十三回日本伝統文化振興財団賞 萩岡松柯(山田流箏曲)』 萩岡松柯・他、VZBG-62、3,850円

編集後記

会報108号をお届けいたします。今号は、京都市立芸大で開催された大会のレポートが中心です。お忙しいなか、レポートをご執筆くださいました皆様に、心よりの感謝を申し上げます。公開講演会、研究発表ともに充実した大会となりました。大会では、学会の印刷物のデジタル化に関するアンケート調査も行いました。この会報にも、アンケート用紙を同封しております。学会活動はいま、一つの転換期を迎えています。広く会員の皆様のご意見を伺わせていただきたく、お手数をおかけして恐縮に存じますが、どうぞ、ご協力をお願いいたします。

次号は5月中旬の発行予定です。

野川美穂子

会報編集委員会

理事：久万田晋、野川美穂子

参事：木岡史明、土田まどか、中川優子、安原道子、横山洗

第8回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

- 1.日時:令和元年(2019年)11月16日(土)16:30~17:35
- 2.場所:京都市立芸術大学講堂
- 3.出席者:309名(委任状提出者147名、書面議決書提出者102名を含む)

〔備考〕正会員 570名、定足数286名

4.議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により植村幸生会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、近藤静乃、曾村みずき両氏が選出された後、以下の議事を開始した。第2号議案と第3号議案の採決は、樋口昭監事による「監査報告書」[添付書類8]の説明の後に行われた。

第1号議案:2018年度(平成30年度)事業報告の件

小塩さとみ理事(総務担当)より「2018年度(平成30年度)事業報告」[添付書類1-1][添付書類1-2]について説明があった。会員から育志賞の学会推薦に関する質疑が上がり、それについては小塩理事から、東洋音楽学会では機関誌への論文・研究ノート掲載もしくは大会における優れた発表実績という条件を設けており、該当者がいる場合に推薦という形をとっているという返答があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案:2018年度(平成30年度)収支決算の件

早稲田みな子理事(経理担当)より「2018年度(平成30年度)収支計算書」[添付書類2-1][添付書類2-2]、および公益目的支出の実施計画[添付書類なし]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案:2019年(令和元年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

早稲田みな子理事より「貸借対照表」[添付書類3-1]、「貸借対照表内訳表」[添付書類3-2]、「正味財産増減計算書」[添付書類3-3]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成

を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案:2019年(令和元年)8月31日現在会員異動状況の件

小塩さとみ理事より「会員の異動状況(2018年9月1日~2019年8月31日)」[添付書類4]について説明があった。会員より、説明の中で言及された昨年の総会資料における会員総数の誤りについて、原因および調査過程についての質問が上がった。それに対し小塩理事から、原因については長年にわたる誤差の累積があり、最近の例では臨時理事会で承認された新入会員の数え間違いなどが挙げられること、調査過程としては金子事務員が事務局における会員データベース、会員名簿、入会退会届などを丹念に参照されたとの返答があった。続けて質問された再発防止のためどの台帳を一番の基準とするのかという点については、今後は事務局における会員データベースで正確な会員数を確認できるとの返答があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 その他

植村幸生議長より「監事の退任および後任監事の選任について」[添付書類5]について朗読説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。また植村議長より塚田健一会員逝去の報が伝えられ、東洋音楽学会への長年にわたる貢献と功績に敬意を表し、一同で黙祷を捧げた。

その後、小塩さとみ理事が「令和元年度(2019年度)事業計画」[添付書類6]について、次いで早稲田みな子理事が「令和元年度(2019年度)収支予算書」[添付書類7]について、それぞれ報告を行った。続けて福岡正太理事より、東洋音楽学会と国立民族学博物館との連携に関する協定が締結されたことが報告された。